

した。母語話者に対する聞き取り調査の結果、アルファベット単独、およびアルファベット頭文字語の音調は外来語と同じ規則性が見られた。一方、アルファベット複合語では、一般の複合語と同じく前部要素の長さによって複合語全体の型が決まるもののほかに、一部の形態素について、それが後部要素に来た場合、複合語全体で非下降調になった。そして、この原因には共通語による影響があると考え、共通語の平板化形態素を後部要素を含む複合語について追加調査したところ、ある種の形態素では複合語全体を非下降調にすることが確認された。この結果は、共通語の平板化形態素が「複合語全体を非下降調にする」という特徴を伴って長崎方言に入ってきていることを意味している。

C8. 大宜味村津波方言のアクセント体系に見られる「形」の対立

小川晋史 (琉球大学・日本学術振興会)

沖縄県の大宜味村津波集落の伝統的方言 (津波方言) のアクセント体系についての記述と分析を行った。先行研究で指摘があるように、津波方言は 2 型のアクセント体系であることが、本研究の数百語の調査によって明らかになった。また、複合アクセント規則については、前部要素 (初頭要素) のアクセント型を複合語全体が引き継ぐタイプの規則であり、西南部九州など近隣の地域においてしばしば観察されるものであった。また、類別語彙については、本土諸方言と異なり、琉球諸方言では 3・4・5 類を 2 つに分割する必要があるという、松森 (1998) の主張が津波方言についても妥当であることを報告した。

さらに、津波方言においては 2 番目以降のアクセント句の初頭で、語頭のピッチの高さが中和する現象が観察されることから、語頭のピッチの高さにはレキシカルな弁別性が存在しないのではないかという主張を行った。

C9. 波照間方言 2 変種の音響音声学比較

ジュゼッペ・パッパラルド (東京外国語大学)

本研究は、消滅しつつある琉球方言のひとつである八重山方言群波照間方言の音声学的な構造を解明し、それ

に関連する歴史的・方言地理学的な変異の重要な側面について考察する。波照間方言は波照間島のみならず、石垣島の白保集落でも話されている。本研究の目的は波照間変種と白保変種の相違を音響音声学的に分析することである。通時の変化を検証するために 2 つの世代間を比較し、それから波照間変種と白保変種を比較する。変異を分析するために母音空間と無声化といった 2 つのパラメーターを手がかりとした。

音響音声学的分析の結果、次の 6 点が明らかになった。1) 波照間方言では 7 母音体系が波照間島の老世代の変種だけに保持されている；2) 波照間島の若世代では i と i が合流する傾向がある；3) 白保変種では世代にかかわらず e と i と i が合流する傾向がある；4) 同様に、o と u も合流する傾向がある；5) 中本 (1976) に表記された e は e に比べ、第 3 フォルマントが低い；6) 鼻音の無声化の実現は 4 変種間で異なり、老人世代より若世代は無声化の割合が小さい傾向がある。

C10. 西日本における「昇り核」の方言—鳥取県青谷町周辺のアクセント

松森晶子 (日本女子大学)

重起伏音調を持つことで知られる鳥取県青谷町を「昇り核」方言と位置づけ、東京のような下げ核の体系と比較することによって一般化を行った。青谷町は、東京と共通した次の様な特徴を持っている。(1) n+1 型体系、(2) 助詞連続の境界点に H 音調が発生、(3) H 音調が隣接して連続する場合は左優先。このうち (2) はアクセント体系の**普遍的特徴のひとつ**であり、またこれは各体系の**複合語規則と共通している**のではないかと、という示唆を行った。

また青谷方言では、CVV 構造を含む語において**重起伏が平板化する**(●○●→●●●)という従来の指摘を、長い拍数の名詞 (「夕食、材木、水車小屋、間柄、利口者」等) によって確認。さらにこの平板化は「素麺 (ソーメン)、挨拶 (アイサツ)、飛行機 (ヒコーキ)、弟 (オトト)」等、**有核の名詞には生じにくい**ことも指摘した。このように無核語のみが平板化しやすいことと関連し、**そもそも無核型と有核型の重起伏はその音声学的実質が異なる**ことを指摘、今後、この体系についての詳細な音響分析を行う必要性があることを論じた。